

2021. 6. 6. 主日礼拝説教  
聖書：ヨハネによる福音書8章1-11節  
『もう罪を犯してはならない』

グリム童話の中にこういう寓話があります。それは神さまが生き物の寿命を決められる時、それぞれに30年はどうかと提案しました。ロバは多すぎると言って18年にしてもらい、犬も多すぎるからと12年にしてもらい、猿も同じように言って10年にしてもらいました。ただ人間だけは30年では少なすぎると言ってロバの分も、犬の分も、猿の分さえ加えてもらって70年にしてもらいました。それでも不満そうにしたというのです。しかし、欲という罪に駆られて多くを求めた人間の寿命も、人間らしく生き生き生きられるのは初めの30年ばかりで、その後の18年は子育てや人のために重荷を負ってロバの如くあくせく働いて、その後の12年は犬のように隅に追いやられて不平不満をウーウーと唸り続け、最後の10年は猿のように背を丸めてノミ取りしているという話です。えらく厳しい物語ですが、もしこれが人間の全てを言い表しているとするならば、人間の本質は欲に駆られた底なしの罪だけであるし、人間の現実はそのからくる苦悩のみということになってしまいます。はたして人間の現実には救いようのない欲深き罪に帰するだけのものなのでしょうか。

本日与えられた聖書の箇所は本来ヨハネ福音書にはなかったとされています。おそらく最終編集の段階で挿入されたものでしょうが、原始キリスト教に遡る大変古い伝承が用いられています。それはヨハネ福音書とは異質な材料であり、むしろ弱さや小ささといった側に立つルカ的な内容構成となっています。物語は罪の現実について聴く者の胸を射貫くような事柄の深さを提起しています。

現行犯で捕らえられたという一人の女性が引き出されます。彼女は石打ちという死刑に処せられる状況でした。当時このような罪は宗教という枠組みに於いて処理されました。ファリサイ派や律法学者はイエスに問います。「どうお考えになりますか」と。モーセの律法に従って「殺せ」と答えれば、イエスの罪人を赦す教えと矛盾してしまうし、かたや「殺すな」と答えれば、神に対する冒瀆

としてイエスが石打ちに遭いかねない状況が作られます。間を置いてイエスは問い返します。「罪を犯したことの無い者が、まず、この女に石を投げなさい」と。

ファリサイ派や律法学者はこの女性が社会秩序や教義を破ったことにおいて加害者であり、自分たちは被害者であると信じて止まなかったのでしょう。しかし被害者意識の偏りは自らがいつのまにか加害者の場に立っていることを明らかにしてくれません。ファリサイ派や律法学者の諸刃の剣のような問いはそのまま彼らに帰されてゆきます。

人は自分の出来ないことを他者が出来ないと言って怒るのです……。ファリサイ派や律法学者にとってこの女性はイエスをおとしめるための恰好の材料でしかなかったのです。罪を見るが人を見ないというところでしょうか。恐れにおののく小さい者を裁く行為に、イエスは罪の自覚を促します。

誰もいなくなった広場にイエスの声が染みわたります。「わたしもあなたを罪に定めない」と。そして彼女はその後の人生を赦された者として生き直すことができたのではなかったかと思うのです。そして、「もう罪を犯してはならない」という勧めにおいて、欲深い罪の奴隷の現実から、罪を認識する現実へと歩みを整えていったのではないのでしょうか。それが信仰という歩みなのでしょう。